

# 小浜温泉調査レポート

## —女子大学生から見た県内観光地の魅力についての考察—

小野澤泰子・荒木乙羽・小田有紗・坂本幸加・鹿野杏菜・芝元結女  
傍島咲織・TRAN THI THANH TUYEN・中橋天音・永淵葵衣・野口絵莉子  
古川莉奈・前山瑠菜・水島澄香・ZHENG HANG

### 要旨

本研究では雲仙市小浜町の小浜温泉を対象地域として、そこで長崎市在住の女子大学生観光客が、どのような観光行動をとり、どのように思い、なにに惹かれるのかを解明することを試みた。小浜温泉での女子大学生の観光行動の分析の結果、伝統的なものより、今の流行を取り入れたおしゃれでかわいい要素が多いものの方に惹かれる傾向が確認できた。その一方で、女子大学生はきっかけさえあれば、小浜温泉のリピーター観光客になる可能性があることや、長崎市民が小浜温泉という観光地をどのように認識しているかの考察も行った。

### キーワード

小浜温泉, 観光行動, 県内観光, 女子大学生, 雲仙市小浜町, 島原半島, 長崎県

### 1. はじめに

長崎県には数多くの観光資源が存在する。多様な文化や宗教、歴史、そして第二次世界大戦の記憶を含め、20世紀の日本の発展に関わる多くの建造物や産業遺産を有する長崎市はその代表としてあげられる。それとは対照的に県東の島原半島(雲仙市、島原市、南島原市)は、日本で最初に「ユネスコ世界ジオパーク」に認定された地域であることを掲げ、雲仙国立公園や雲仙温泉、小浜温泉、島原湧水群等をはじめとする自然に由来する観光資源が豊富であることをアピールしている地域となっている。大自然や温泉、スポーツ等を楽しめる地域として、全国からだけでなく県内からも多くの観光客を引き寄せている島原半島であるが、中でも長崎市中心市街地から東に約45km(車の運転で約1時間)の距離にあり、海沿いの景色も美しく歴史のある雲仙市小浜町にある小浜温泉は、長崎市民にとっても日帰りや一泊旅行といった小旅行に適した魅力のある観光地となっている。

2020年に始まった新型コロナウイルス感染拡大による世界各地への経済的影響は2022年2月現在においても続いており、特に人の移動がともなう観光分野の産業では影

響が顕著に表れており、長崎県内の宿泊者数はコロナ禍前の2019年に比べ7～8割限の状態が続いている（長崎新聞，2021年6月23日）。そんな中、2021年4月より始まった「県民割」キャンペーンにより「県民による県内観光」が盛んに行われるようになってきている。各地の県民割キャンペーンは2022年3月頃にいったん終了となるが、コロナ禍がいつまで続くか分からないこの状況下において、今後も県民にいかに関内を観光してもらいリピートしてもらえるかを分析することが、観光地の地域経済を存続させるためにも必要な課題として注目されるべきであると考えられる。

そこで本研究では、長崎県内にありながら長崎市在住の人にとっても「まなざし」の違いが十分に感じられる観光地である雲仙市小浜町の小浜温泉地域（以下「小浜温泉」と書く）を対象地域として、そこで長崎市在住の観光客が、どのような観光行動をとり、どのように思い、なにに惹かれるのかを解明することを目的とする。県内での県民の観光行動の特徴やその傾向の解明は、コロナ禍だけでなくコロナが終息した後でも、地方観光産業の存続のためのヒントになりうるものであり、研究することは意義があると考えられる。

長崎県民の観光行動の分析にあたっては、2021年12月4日に小浜温泉地域で行われた活水女子大学日本文化学科3年生のゼミの校外学習（巡検）の際の、参加した学生12名および教員1名のとった行動と率直な感想等を元にして行う。学生たちは各々調べるテーマがあり、テーマに基づいた事前学習をした上で小浜温泉での巡検に臨んでいたが、それらの調査テーマとは別に、小浜温泉を歩き回りながらとった行動や思ったこと等については、「県民による県内観光行動」の分析対象に値すると考えられる。

本稿ではまず2章で、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け日本国内の観光傾向がどのように変化してきたか、および長崎県内で行われてきた観光支援キャンペーンの詳細とその効果についてまとめる。3章では、小浜温泉が一般的にどのような観光地として捉えられているかについて、流通している観光情報を元に、その紹介のされかたの特徴をまとめる。4章では、2021年12月に行われた活水女子大の巡検の概要を述べた上で、当日の女子大学生たちの行動と感想を元に、県民による県内での観光行動の分析・考察を行う。そして5章で、改めて3章と4章の内容を比較しながら、女子大学生が小浜温泉という観光地に感じている魅力についての考察を述べる。

## 2. 県内観光の人気高まりの背景

日本国内で新型コロナウイルス（COVID-19）が感染拡大し始めた2020年以降、2022年2月の現時点では2回のワクチン接種が済んでいる国内人口は1億人を超え、全人口の79.2%にも達している（NHK 特設サイト）にもかかわらず、未だに感染拡大の波は終息しておらず、政府による緊急事態宣言が度々発令されている。2022年2月現在も新規感染者数が大幅に増えた第6派の最中にあり、長崎県においても県内全域にまん延防止等重点措置がとられ、県民には県外への不要不急の往来を控えたり、飲食店等にも午後8時までの営業時間の短縮や終日酒類の提供を行ったりしない等の行動・活動の制限が求められている。（長崎県ホームページ，2022年2月2日）コロナ禍のこの2年間、長崎県の観光業は経済的打撃を受け続けており、県民にとっても気軽に県外旅行ができなくなってしまっていてフラストレーションが溜まっている状態が続いているが、県民によ

る県内での旅行や観光行動が地域経済を支える鍵として着目され始めている。

政府は、コロナ禍で低迷した観光需要の喚起策として2020年7月から「Go To トラベルキャンペーン」事業を開始した。その効果によって全国各地での旅行者が増えた一方（NHK NEWS WEB, 2020年9月1日）、キャンペーン効果と観光地での感染者数の増加との関連が明らかにされないまま様々な問題が浮き彫りとなり、2020年12月28日にGo To トラベルは一時停止措置が取られることとなった。（毎日新聞, 2020年12月17日、Go To トラベルホームページ）当初政府はGo To トラベルの停止期間は2021年1月11日までと発表していたが（日本経済新聞, 2020年12月14日）、度重なる新型コロナウイルスの感染状況の悪化により2021年中の再開は見送られ続けた。（NHK NEWS WEB, 2021年11月13日）また2022年1月7日に、新型コロナウイルスの変異株「オミクロン株」の急速な感染拡大を受け、Go To トラベル事業の早期の事業再開は難しいとの見解を国土交通大臣が発表してからは（NHK NEWS WEB, 2022年1月7日）、2022年2月現在、未だに再開のめどは立たないままの状況が続いている。ただ政府は2021年の早い段階からGo To トラベルの代わりとなる「地域観光事業支援」、通称「県民割」キャンペーンの準備を進め、2021年4月から各地で実施されるようになった（観光庁ホームページ, 2021年11月19日）。こちらは都道府県内の住民向けの観光活動を支援する内容であることや、リスクの伴う人の県外への移動もないため、利用者・事業者共に利用が好調で、各地の観光地で一定の経済効果をもたらしている。（日本経済新聞, 2021年11月27日）

長崎県における県民割キャンペーンは県と県観光連盟が「ふるさとで“心呼吸”の旅」という名称で実施し、2021年3月8日から県民向けの県内宿泊料金割引券の販売が開始された。県民は千円で6千円相当の宿泊券を最大で5枚購入できるというもので、登録されている県内428施設での利用が可能。販売が始まってすぐに問い合わせが殺到し、その日の内に販売分が完売する人気ぶりであった。4月末まで利用可能ということもあり、早速各地の宿泊施設での宿泊予約および利用がみられた。（長崎新聞, 2021年3月8日）この第1弾となった心呼吸の全7万泊分は早急に売り切れとなったことを受け、4月14日から心呼吸第2弾が実施されることになった。第2弾からは、利用者が決められた用紙に必要事項を記入して宿泊施設に提出すれば、1人1泊あたりの宿泊料金の50%（上限5千円）を割り引く仕組みに変更となり、利用したくても券が購入できなくて利用できないといった利用者の問題は解決された。5月1日からは更に心呼吸手続きをした県民に対して2千円分の地域限定クーポン（チェックアウトした日まで使用可能）の配布も始まった。（長崎新聞, 2021年4月20日、ながさき旅ネット）しかしこの県民割キャンペーンは都道府県がステージⅡ相当以下の警戒レベルであることが前提条件となっているため、コロナの感染状況により心呼吸は一時利用停止されることもしばしばあった。実際心呼吸は2021年4月23日～6月30日、8月11日～9月24日の間一時停止され、2022年1月24日から再び利用停止期間となっている。（長崎新聞, 2021年6月23日、心呼吸の旅WEBサイト）心呼吸利用の停止期間は感染状況に大きく左右されるため、いつ一時停止になるか、停止期間が提示されていてもそれがいつ期間延長になるか、または期間が短くなるのかは分からないという不安定な状況が続いている。長崎県の状況をよく反映している長崎新聞の記事（2021年4月20日、6月23日、7月2

日、12月11日)においても、心呼吸の停止・再開の影響によって、旅行の予約を立てたり直前に宿泊キャンセルをせざるを得なくなった利用者や、集客回復への期待や歓喜そして再び遠のく宿泊客に落胆する事業者たちの、一喜一憂や生々しい悲痛な嘆きが度々紹介されている。

しかし、コロナが終息しない限り解決されない問題が多くある中、県民割キャンペーン効果により「新たな県内客を取り込んだ手応えがある」と話すホテル担当者もいるように(長崎新聞, 2021年6月23日)、県民による県内観光に新たな可能性を感じた観光業従事者も多いのではないかと考えられる。また、今はまだ心呼吸キャンペーンの利用を前提とした県内観光を行っている県民が多いように思われるが、今後キャンペーンがなくなり、それでも県を越えての移動が制限される状況が続いた場合、県民は旅行することを考える時、やはり県内観光に目を向けるのではないかと想定される。観光には、一度行ったらまた行きたくなるという要素があるため、今回の心呼吸を機に今後も県内観光をリピートする県民客も増え続けるのではないかと考えられる。

### 3. 「小浜温泉」の観光情報および認識のされ方

小浜温泉は一般的にどのような観光地として人々に捉えられているのか。この章では一般的に流通している小浜温泉についての観光情報と、長崎県民が思い浮かべるイメージの特徴についてまとめる。

#### 3.1 全国向けの旅行雑誌による情報

観光客は一般的に旅行雑誌を通して観光地についての情報を得るものと思われる。そこで本研究では小浜温泉についての全国的な認識を調べるために、旅行雑誌『まっふるマガジン まっふる長崎 ハウステンボス 佐世保・五島列島 '19』(以下『まっふる長崎』と書く)での小浜温泉の紹介のされ方から分析を行った。まっふるマガジンシリーズは全国の書店で手に入る一般的な旅行雑誌の一つである。旅行をしようとする観光客が手を出しやすい価格設定でありながら観光するためには十分な情報量が載っているが、全ての情報を網羅的かつ平等に扱っているわけではなく、観光客向けに既に人気のあるまたは押さえておくべき最新の情報が選ばれて記載されているということも特徴である。近年では、スマートフォンをつかい観光地についてのまとめサイト等を検索して雑誌や本を買わないで済ます観光客も多くなった。しかし、ネット検索だけで情報収集をしようとする、得られる情報の多さにながりがいいのかだんだん分からなくなってしまふといった問題もあるため、旅行雑誌は依然有力な観光情報の媒体となっている。また、まっふるマガジンをはじめ、雑誌を購入すると電子書籍版も読める仕様のものもあり、スマホユーザーに対応した情報媒体となっている。

『まっふる長崎』では長崎県を大まかな5つのエリアに分けて紹介している。エリアというのは必ずしも市町村レベルのまとめりではなく、観光客が捉えている地域の名称を元に分類が行われている。全135ページ中、エリアごとの情報は長崎タウン57ページ、佐世保18ページ、雲仙・小浜・島原12ページ、平戸8ページ、五島列島・壱岐・対馬15ページの順で記載がある。島原半島については「雲仙・小浜・島原」というくくりで紹介されており、「温泉、湧水、緑の山々に囲まれた」や「自然がもたらす温泉と湧水を求めて」というキャッチフレーズが使われている。ページ数については雲仙4ペー

ジ、島原3ページ、小浜は2ページという配分で、一見小浜のページ数は少ないように思えるが、決して魅力や特徴が少ないわけではない南島原市のように島原半島の中で取り上げられていない地域もある中で2ページあるということは、それだけ小浜が特徴的な観光スポットを有する地域であると認識されているということである。大自然や豊かな水という印象でまとめられているこの3地域であるが、雲仙は「日本初の国立公園でもある温泉郷」、島原は「城下町と湧水めぐりが楽しめる」、小浜は「高温の湯が湧く長崎屈指の湯処」というようにそれぞれ地域の特徴の違いが強調されて紹介されている。

小浜温泉地域については、「島原半島の西側、雲仙国立公園の西麓に位置し、橘湾に望む風光明媚な温泉地。立ち寄り湯ができる湯宿やご当地グルメなどが楽しめる。」「長崎市街から車で1時間ちょっと、雲仙までは25分ほど。およそ30か所の源泉があり、100℃を超える高温の湯が湧く源泉もあるという小浜温泉。日本一の源泉熱量の湯は豊富で、風呂はもちろん、その湯を生かした名所や味を満喫しよう!」というような地域のざっくりした紹介文の後に、4つの名物があるとして、下記のような記載がされている。

#### 名物1. 海を見渡す「露天風呂」

温泉街をつらぬく国道57号沿いにモクモクと白い湯けむりがたなびく風景は、源泉温度100℃超えの小浜温泉ならではの。橘湾が目の前に広がる立地で、海を眺めながら入浴ができる眺望のよい風呂が多いのも、この温泉の魅力の一つだ。オレンジ色の太陽が海へ沈んでゆく夕焼け頃は最高のロケーション。

#### 名物2. 日本一なが〜い「足湯」

泉街の中心部、小浜マリンパークにある「ほっとふっと105」は、全長105mの日本一長い足湯。足湯の一部は、歩いて足の裏を刺激するウォーキング足湯、ペット足湯になっている。

#### 名物3. いざ食べ比べ「小浜ちゃんぽん」

小浜ちゃんぽんは、橘湾沿いにある土地柄か、魚介ベースのスープが多い。さらに、定番メニューとして寿司屋、和食処、はては居酒屋、レストランに至るまでさまざまなジャンルの店で食べることができるのが特徴だ。各店とも独自の味を追求している。

#### 名物4. 熱気むんむん「蒸し料理」

小浜温泉の噴気を生かした料理なら、波の湯「茜」の隣にある「海鮮市場 蒸し釜や」へ。水槽を泳ぐ魚やかに、地元の旬の野菜などを好みでチョイスすれば蒸し釜で調理してくれる。たっぷりの野菜とともに楽しめる蒸し豚セット、点心セットなど手軽に利用できるセットメニューや定食なども充実。

以上のように、大きく分けると「海を眺めながらの温泉（足湯）」と「小浜ならではの食事」の2つが、小浜温泉に行ったら楽しむべきポイントとして紹介されている。

また、上記の4つの名物とは別に、小浜温泉周辺のデフォルメされた長細い地図が2ページに渡って載せられており、小浜温泉のゆるキャラ「おゆっぴ〜」が紹介しているという形式で「小浜の見どころ」と短い紹介文が書き込まれている。見どころとして紹介されているものは、北から順に下記の通りである。

緑のトンネル（風景）、アン・シャーリー・ハウス（レストラン）、いぼとり地蔵、上の川湧水、小浜温泉観光協会、ケーキとパンの店パック、ほっとスポット 105（売店）、小浜歴史資料館（湯太夫跡）、サンセットラブベンチ、山口海産（海産物直売店）、小浜海産（海産物直売店）、オレンジジェラート（ジェラート屋）、オカモト・シェ・ダムール（カフェ）

この他にも、地図には旅館やホテルの名前（中には「長崎の宿」という特集ページで更に詳しく紹介されているものもある）、食事処やレストランの名前、コンビニ、ガソリンスタンド、神社仏閣、バス停、公園、学校、警察署等の記載がある。これらは観光する際に直接役立つ情報も含まれるが、この地図を使って移動する観光客のための目印となる情報という側面も持つ。

### 3.2 公式として発信されている観光情報

1 節で挙げた観光情報は、あまり小浜温泉になじみのない観光客向けのもので、内容は限られており、若干観光客の消費活動を促す商業的な面もある。そこで、この節では小浜温泉が公式として紹介している観光情報と比較してみたい。ここで比較するのは、長崎県観光振興課および長崎県観光連盟が運営する観光情報サイト「ながさき旅ネット」、雲仙市が運営する観光情報サイト「雲仙市観光ナビ」、小浜温泉旅館組合公式サイト「小浜温泉」に掲載されている小浜温泉の観光情報である。いずれも、観光客がネットを使って情報収集する際に閲覧する可能性が高い公式ウェブサイトである。

「ながさき旅ネット」については「小浜温泉ぶらぶら歩き」という特設ページに、小浜温泉の 13 カ所の観光スポットが地図とともに紹介されている。町歩きを想定した順番で掲載されており、各観光スポットの名称は下記の通りである。

小浜温泉観光協会、夕日広場、小浜神社（龍の天井絵）、入徳師翁碑（伝明寺）、いぼとり地蔵、上の川湧水、庄屋元跡、光泉寺、炭酸泉、小浜温泉足湯ほっとふっと 105、小浜温泉ジャカラダ、本多湯太夫邸（小浜歴史資料館）、豊後湯の跡

ほっとふっと 105 に関しては詳細ページへのリンクが張られており、それだけここが小浜温泉の重要な観光スポットであることが伺える。ここで挙げられている場所の特徴は、小浜の歴史を感じられるような史跡や記念碑がほとんどであり、入館料 100 円の小浜歴史資料館以外は、基本無料で観光できるということにある。4 章で詳しく述べるが、歴史的史跡等については、その方面に関心のある人を除き、女子大学生にとってはあまり楽しいと思えるものではなく、このサイトも彼女たちの興味を引くような内容になっていなかった。

次に「雲仙市観光ナビ」と小浜温泉旅館組合公式サイト「小浜温泉」（以下、混同を防ぐために「旅館組合サイト」と書く）についてである。上記の「ながさき旅ネット」の小浜温泉のサイトは、ネットで「小浜温泉」と検索すると上位に現れてすぐ閲覧できるようになっている。しかし検索上位に現れる他のウェブサイトは、旅行会社や旅行情報まとめサイトといった企業によるものばかりで、残念ながらこの 2 つのサイトは良質で貴重な確かな情報を公開しているにも関わらず、簡単な検索では見つけにくいという難点がある。特に「雲仙市観光ナビ」は、欲しい情報に到達するまでに何度もクリックしたりページをいったりきたりしないといけないというページの見づらさから、閲覧数が

伸びず、閲覧数の順位によるところの大きいネット検索において、上位に入れていないのだと考えられる。

「雲仙市観光ナビ」は雲仙市全体の観光情報を載せているサイトのため、小浜温泉についての特集ページのようなものはない。小浜温泉というページには300字弱の基本情報と小浜温泉観光案内所の電話番号、旅館組合サイトへのリンク、小浜温泉での立ち寄り湯まとめページ（4施設の紹介あり）へのリンクのみの掲載である。しかし郷土食という項目内には「小浜ちゃんぼん街道公式地図」（小浜ちゃんぼんマップ）が見られるページがあり、この地図には観光客がいかにも欲しそうな食べ物の情報が写真とともに魅力的にまとめられている。小浜ちゃんぼんマップはその名の通り、小浜ちゃんぼんが食べられる14カ所の店の情報が載っているだけでなく、スイーツが楽しめる7カ所の店の紹介もされている。この地図はこのページからデータのダウンロードもできるが、小浜温泉観光協会等でも紙媒体のものを入手できる。小浜歴史資料館についても特設ページも設けられているが、このページにたどり着くまでに「知る・学ぶ」の中の「歴史・文化」をクリックしないといけないため、見つけるのが少し難しいところにある。クリックしてもコンテンツが用意されていないページや、写真もない説明文のみのページがある中で、ここでは14枚もの写真が使われて資料館の紹介がされている。実際、とてもきれいで充実した内容の資料館ではあるのだが、その割にはその魅力があまり伝えきれていないような印象を受けるページとなっている。

「旅館組合サイト」の方は、温泉宿に宿泊する観光客向けに情報を提供するサイトとしての位置付けを明確にしているためか、大変見やすく分かりやすい構造になっている。そのためか、ウェブ検索においては雲仙市観光ナビよりも上位に現れ、見つけやすくなっている。トップページには小浜温泉の最新情報の欄があり、ほっとふっと105やどの宿屋が臨時休業をしているか等が分かるようになっている。トップページには他にも「小浜のお宿一覧」がまとめられており、13の宿やホテルが写真とともに特徴や値段が紹介されて、それぞれの宿の詳しい情報も別ページが設けられている。旅行雑誌『るぶ温泉&宿九州』内の小浜温泉に関するページには9カ所の温泉宿の紹介が載っているが、それよりも詳しく気の利いた内容になっている。観光マップをまとめたページには、雲仙市観光ナビにも載っていた小浜ちゃんぼんマップだけでなく、小浜温泉観光マップ（日本語、英語、韓国語、中国語）も載せられており、それだけでなく独自の「街歩き」ページも設けて3つのコースを提案している。「お土産・お買い物」と「飲食店」というページでは、それぞれ観光客が求めていそうな店の情報を詳しく魅力的に紹介している。雲仙市観光ナビが旅館組合サイトをリンクに載せているだけあり、全体的に充実したコンテンツのサイトである。あえてこのサイトの難点を挙げるとすれば、情報量がとても多く詳しいため、実際に小浜温泉に宿泊している観光客向けのように思えるところである。観光客が宿に泊まり温泉にも既に入り、それでも時間があるので、さて、どこに行こうか、何を食べようかといったことを考える時に、大変役に立つ情報集のように感じるのである。まだ小浜温泉に行ったことはないがざっくりしたことを知りたいと思う人にとってこのサイトは、詳しくすぎて分かりにくい、どの宿もしくは店がいいのか分からないという印象を受けるかもしれないと思われる。一方、何度も小浜温泉に行っているような県民の観光客には適している情報媒体であるのかもしれないと考えられ

る。

以上のように、公式によって発信されている小浜温泉の観光情報はそれぞれに特徴や良さがあることが分かった。しかし、やはり分かりやすい観光情報は、第三者による情報の取捨選択が行われ、少しのコメントの入った旅行雑誌の内容のように感じられた。

なお、旅行会社や個人が作成した小浜温泉に関するまとめサイト等については、数が大変多いため、本研究では取り扱わないものとする。

### 3.3 県民による小浜温泉の認識

小浜温泉についての一般的な観光情報は前節までに紹介した通りであるが、それら以外で長崎県民が持っているイメージや認識について、ここで整理する。この節での情報源となっているのは、活水女子大学日本文化学科の3年生14人である。全員現在、長崎市および周辺地域に在住しており、この内12人は長崎県出身者であるため、小浜温泉には「子供の頃、家族と行ったことがある」「何度も行ったことがある」「友達とのドライブで行ったことがある」という人がほとんどである。彼女たちの小浜温泉についての知識は、一般的な旅行雑誌以上のものを持っている人はいなかったが、それでも雑誌や公式サイトから得られる情報にはない、特有の共通の認識を持っていることが明らかになった。

4章でも述べるが、3年生たちはゼミでは小浜巡検をするにあたり事前学習を行っている。そこで学生たちは、各自どのような調査テーマにするかという話し合いをしたのだが、「小浜といえば何が思い浮かぶか？ どんなものが有名か？」という質問に対し、小浜温泉に限らない、その周辺地域のものもいくつか挙げていたのである。小浜温泉らしい足湯や高い温泉宿（いつか泊まってみたい）といったもの以外に、じゃがちゃん

（千々石観光センター名物のジャガイモ料理）や雲仙サイダー、温泉卵といった、雲仙市内の小浜温泉周辺の名物も含まれていたのである（しかし島原名物の「かんざらし」までは出なかった）。これは、長崎市から車で小浜・雲仙方面に行く際、国道57号を使うためであると考えられる。国道57号は雲仙市の愛野町、千々石町、小浜町を貫き、雲仙地獄を越え、島原半島の東側の島原市にまで至る道路である。長崎市から小浜温泉に行く際は、ジャガイモの産地として有名な愛野・千々石でじゃがちゃんを食べたり、小浜温泉から東に14kmのところにある雲仙地獄にも立ち寄るため、小浜温泉に関する記憶が国道57号沿いのものと関連付けられているのだと考えられる。また、そのような観光ルートのパターンを何度も繰り返すうちに、小浜温泉といえば「じゃがちゃん」「雲仙サイダー」という認識が定着しているのではないかと思われる。よって、どの移動手段でどのルートを使い小浜温泉に向かうかによっても差異は生じるかもしれないが、長崎県民の小浜温泉についての認識には、その周辺地域の観光情報も含まれていると考えられる。

小浜温泉という一点だけで観光地を捉えるのではなく、そこに至るまでと、後の、前後のルート（線）についても考慮しつつ、小浜温泉での県民の観光行動を分析することも重要であることが分かった。



#### 4. 小浜温泉での女子大学生の観光行動について

この章では、長崎市およびその周辺地域在住の県民である女子大学生が、小浜温泉でどのような観光行動をとるのかを分析し、考察を行う。

まず、女子大学生たちが小浜温泉で観光することになった経緯について述べた上で、3章にも書かれているような小浜温泉ならではの観光ポイントでの彼女たちの反応と、観光ポイントから外れたところでの反応について、そして最後に小浜温泉「以外」での行動・反応についてまとめる。

##### 4.1 小浜巡検の概要

活水女子大学国際文化学部日本文化学科地域ビジネスコースでは、授業で学外に行き地域についての理解を深める校外学習（巡検）が度々行われている。2021年度後期の3年生の専門セミナー（小野澤ゼミ）では「千々和・小浜の地域産業を知るためのフィールドワーク」という大枠の下で、ゼミ生14名全員で、テーマ別に現地調査をすることになった。学生たちは2~4人ごとの5つのグループに分かれ、それぞれの研究テーマ（歴史、農業、温泉、宿泊業、食文化）にそって事前に調べ物や学習をしたりした上で、2021年12月4日の小浜巡検（現地調査）に参加している。巡検当日の参加者は引率教員1人とゼミ生12人。移動手段は車で、教員の車を含め計4台で乗り合わせて移動した。移動ルートは、まず千々石観光センターで集合し（参加者確認）、小浜温泉まで再び車で移動、ほっとふっと105で再び集合、全員一緒に町並みを観察しながら小浜温泉観光協会まで歩き、情報や必要な資料をここで収集。一旦、昼休みとして解散した後（昼食は各自でとる）、午後に小浜歴史資料館で再び全員集合し、資料館の係の方の説明を聞きながら一緒に見学。見学を終えた人から、各自のテーマにそった調査を再開し、調査が終わり次第解散という流れてであった。（資料館見学後、一部の学生は教員とともにほっとふっと105の足湯を体験した。）

本研究では、学生それぞれが調べた研究内容には触れないが、学生たちが巡検の合間やその後に思った感想やとった行動を「女子大学生の観光行動」として捉えて分析を行う。

大学生は、社会人ほどではないにしろ、アルバイト等によりある程度の経済力を有し、大学3年生にもなると車の運転にも慣れてきていて長距離運転もできるような行動力もあり、時間の余裕もある社会的階層にいるといえる。またマーケティングでは、女性は自分が経験した感動を自分の属するグループに伝えたり、友達を誘って同じ場所を再び訪れたりする傾向があることが知られている（そのため宣伝効果を見込んでのレディーズ向けサービスが圧倒的に多い）。このことから、女子大学生の観光行動に着目し分析することは、マーケティング分野においても意味があることであると考えられる。

##### 4.2 小浜温泉ならではの観光ポイントについて

ここでは、3章でも挙げられていた小浜温泉の4つの典型的な観光ポイント（湯けむり、ほっとふっと105、小浜温泉ならではの料理、小浜歴史資料館）についての女子大学生の感想や反応をまとめる。

### ①湯けむり

旅行雑誌の中でも、国道 57 号沿いに白い湯けむりがたなびいているという風景描写があるように、小浜温泉ならではの景色の一つである。学生も「写真 1 にある通り街の至るところに湯気がたっているのが見受けられた。足湯や宿の煙突からはもちろんのこと、他にも、道の溝から湯気がたっている場所がたくさんあった」や「小浜の温泉街は、歩道の隙間の穴から湯気がでていて、ゆで卵みたいな匂いがしてきた（写真 2）」と書いているように、強く印象に残ったようである。



写真 1, 2 道路わきから立ち上がる白い湯けむり

(左：鹿野撮影、右：坂本撮影)

### ②ほっとふっと 105 (足湯)

小浜温泉に着いて最初の集合場所だったのがこの「ほっとふっと 105」だったこともあり、学生たちもテンション高めで、海を背景に記念撮影をしていた。(写真 3, 4)



写真 3, 4 海を背景に集合写真を撮る学生たち

(左：小野澤撮影、右：古川撮影)

ほっとふっと 105 の源泉が湧き出ている場所に巨大な蒸し釜があるが、その前でも集合写真を撮ってもらった。(写真 5)



写真 5 湯釜前でのゼミ集合写真

(鹿野提供写真)

「足湯のところでは、温泉卵を作ることができる蒸し器（蒸し釜）があり、寒さとの差があるので湯気が白くて食欲をそそられた」と感想を述べた学生もいる通り、天気はいいものの、12月のため寒く、写真のようにみんな冬服を着込んでいる。教員はここでみんなに足湯を体験してもらいたいと思い呼びかけたが、誰も入りたがらなかったため、足湯体験はこの時はしないことになった。教員は、小浜温泉といえば足湯（ほっとふっと 105）は必ず入るものだという思い込みがあったので、全員「入らない」という選択をしたことを意外に感じた。

なお、小浜歴史資料館を見学した後に、一部の学生は足湯に浸かっているの、その感想を一部紹介する。

「みんなでタオルを買って（足湯に）入ったが、すごく気持ちよかった。（温泉には）効能がたくさんあり（写真 6）、さまざまな世代の方がいた。」



写真 6 ほっとふっと 105 にある小浜温泉の効能書き

(前山撮影)

「最後に足湯を体験した。観光客の方が子どもからお年寄りまで幅広い年齢の方がたくさんいた。端のほうには、ペットと入れる足湯もあったため、今度ペットと行こうと思う。」「私は初めて足湯を体験した。足は赤くなったが気持ち良かった。外国人が体験したらいい思い出せると思う。」(写真7, 8, 9)



写真7, 8, 9 おそろいの温泉タオルを使って足湯に浸かる学生たち

(小野澤撮影)

最後に5人の学生と教員が足湯に浸かったが、最初に入らないといった理由の一つに「準備ができていない(タオルがない)から、まだ入りたくない(でも後で入るつもり)」というものもあったように思われる。実際足湯に入った学生たちは、小浜温泉を歩き回りながら、土産物店をチェックしており、どこのタオルが安くてかわいいかを見比べていた。タオルを買う場所を決めてからのこの5人の行動は早かった。

なお、最後まで入らなかった他の学生たちの理由としては「今まで島原や小浜には何度か行ったことがあり足湯も入ったことがあるが、いつもは足湯に入るだけでいろいろ

なところを見て回ったことがなかったなので、今回いろいろなお店や資料館を見て回ることができて面白かった」という感想からも垣間見えるように、「既に小浜温泉の足湯は何度も経験しているから入らなくても別に構わない（それよりも他に见たいものがある）」ということにまとめられるのではないかと考える。

### ③小浜温泉ならではの料理

小浜温泉の「蒸し料理」と「小浜ちゃんぼん」は、旅行雑誌でも名物として紹介されているほどである。学生の中で蒸し料理を食べたことがある人はいなかったなので、教員は昼時にも全員に、みんなで蒸し料理の店「蒸し釜や」に行こうと誘ってみた。しかし「せっかく小浜まで来たのだし、食べたことのない蒸し料理を食べてみたい」という乗り気の学生は2人だけであった。そのため昼休みは一旦解散となり、お昼は各自でとることになった。

#### ・蒸し料理

蒸し料理を経験した学生の感想は次の通りである。「足湯の近くにある「蒸し釜や」でお昼を食べた。新鮮な海老や、水槽の中の蟹、ほたて、サザエなどを自分で選んで蒸すことができる。魚介類の他にも、にくまんや、せいろに入った野菜の盛り合わせなど、多くのものを蒸して食べることでできる名物店である。」(写真 10, 11, 12)



写真 10, 11 店内で食材を購入し、係の人に蒸し調理を頼んでいる学生たち

(小野澤撮影)



写真 12 蒸し上がったばかりの料理

(芝元撮影)



写真 13 蒸し料理を満喫する学生たち

(小野澤撮影)

蒸し料理は、食材によって蒸すのにかかる時間が違うため、みんな料理が蒸しあがるまでの時間の違うタイマーを持って、テーブルで待つこととなる。タイマーが鳴って料理を取りに行き、食べ始めようとしていたら、もう一つの料理のタイマーが鳴って、また慌てて料理を取りに行く、ということもしばしばある。少し慌ただしいが、それも含めて楽しい食事だったように思う。(写真 13)

・小浜ちゃんぽん

写真はないが、お昼に小浜ちゃんぽんを食べた学生もいたとのことである。

学生たちは別に、名物料理を食べたくなくて蒸し料理を断ったのではなく、自分たちで小浜温泉を探索して、食べるお店を楽しみながら選びたいと思っている可能性もあると思われる。なお、この他の学生たちがお昼に何を食べたかは、次の節「小浜温泉が特に強調していない観光ポイントについて」内で詳しくまとめる。

④小浜歴史資料館（本多湯太夫の邸宅跡）

小浜歴史資料館は、旅行雑誌には小さな写真とともに「藩名により小浜温泉を管理した本多湯太夫家を改修、復元、保存。」とさりげない紹介文が載っているだけである。しかし小浜温泉公式の3つのサイトにもそれぞれしっかり写真付きで説明が載っており、観光情報からだけではその魅力はいまいち伝わってこないが、確かに名所の一つである。ここを訪問した学生たちの感想は、次の通りである。

「午後からは、小浜歴史資料館に行った。築 160 年の建物や、その当時の物が保管されていて歴史を感じた。」

「小浜には何度か行ったことがあるが、資料館があることは知らなかった。この巡検がなければ足を運ぶことはなかったと思う。小浜温泉の歴史を知り、学ぶことが出来たので楽しかった。」

「歴史資料館がこんなところにあったのだと知らなかったので驚いた。建物も 1844 年に造られたもので、歴史を感じられる立派な建物だと思った。」

このように、ほぼ全員が「初めて訪れた、存在を知らなかった、行ってみたら面白かつ

た」というような共通の感想を述べている。(写真 14)



写真 14 小浜歴史資料館入口にて、足元を流れる温泉の熱気で温まっている学生たち  
(小野澤撮影)

学生たちが資料館を面白いと感じたのには、資料館の担当の方によって、邸宅や敷地内の源泉についての説明があったからだと思われる。(写真 15, 16)



写真 15, 16 担当の方による説明を聞く学生たち  
(左：小野澤撮影、右：小田撮影)

説明によると、小浜温泉にはこのような温泉の湧き出る源泉が 30 カ所ほどあり、普通の家庭でも使用料を払えば、ここの温泉を自宅まで引くことができるという話がされたが、「資料館には温泉の配管があった。その配管は自宅につながっているそう。定額を払うことで、家で温泉を使い放題になるので、いいところだなと感じた」や「小浜にはお風呂が温泉のお湯が出てくる家があると聞いて羨ましかった」という感想があるように、学生たちは自分の日常生活と比較しながらいろいろなことに想像を巡らせているようであった。

また、ここの源泉のパイプには炭酸カルシウムの沈殿物である「湯の花」が溜まりやすらしく、掃除して掃きだされたものがたくさん落ちている。ご自由に持って行ってくださいとのことだったので、いくつか持ち帰っている学生もいた。(写真 17, 18)



写真 17, 18 敷地内の源泉周辺にたくさん落ちている「湯の花」  
(小野澤撮影)

湯太夫の邸宅は建物の立派さだけでなく、中の展示物も大変興味深く、当時の人々の生活について想像する学生もいた。(写真 19, 20)



写真 19, 20 当時の暮らしぶりがリアルに感じられる展示物  
(芝元撮影)



また、湯太夫邸の縁側に座って休んだり、友達とおしゃべりをしつつも、そこからの眺めから昔の様子に思いを馳せる学生もいた。

「歴史資料館では湯太夫の屋敷を見ることができ当時の家のつくりや家具などを見学することができたことがとても印象に残った。小浜には古くからある旅館と新しくできた旅館の両方がありながら景観に一体感があり、立ち上る湯気と海を見渡すことができる景色の良さがとてもいいなと改めて思った。避暑地として小浜や雲仙を訪れていた明治時代の人々も同じように美しい景色と温泉を目当てに来ていたのかと考えると感慨深い気持ちになった。」(写真 21, 22, 23)



写真 21, 22 湯太夫邸の縁側

(中橋撮影)



写真 23 海が見える縁側でくつろぐ学生たちと教員

(野口撮影)

歴史にあまり興味がない学生が多い中、「昔の小浜の建物の中を詳しく見れて、個人的に歴史に関することには興味があるので、小浜の昔の人の暮らしが見れてとても面白か

った。卒論でも城下町などの昔の人々の暮らしについて書こうと思っているので、参考になった。」というように、知的好奇心がくすぐられている学生もいた。

#### 4.3 小浜温泉が特に強調していない観光ポイントについて

この節では、前節とは対照的に、小浜温泉ではマイナーな観光ポイントであるが、学生たちが強く反応したこと（ピタサンド、オレンジジェラート、おゆっぴ〜、人や雰囲気について）についてまとめる。

##### ①ピタサンド

前節で紹介した小浜温泉の名物料理を食べなかった半数以上の学生たちはなにを食べていたか。答えは、長崎県産のブランド「鶏長崎ばってん鶏」を使用している、からあげ専門店のピタサンドである。（写真 24, 25）

「私が一番驚いたことは、ご飯屋さんについてだ。ランチは各自ということで何があるのか探しながら歩いていると、黄色い可愛い建物のチキン屋さんを見つけた。小浜は歴史のある町なので、蒸し釜といった昔ながらの食が多いと勝手に思い込んでいた。だが、ピタサンドというパンにチキンが挟まっている現世代で言う“映え”な食べ物が売っていたので驚いた。とてもおいしかったのでもう一度食べに行こうと思う。」

「お昼ご飯は小浜の中でも唐揚げがおいしいといわれている slow chicken というお店に行った。唐揚げも大きく、初めて食べたが、また小浜に行った際には食べたいなと思うくらいおいしかった。」



写真 24, 25 食べ歩きができ写真映えもする slow chicken のピタサンド

(左：傍島撮影、右：水島撮影)

この他にもたくさんの写真と「おいしかった、また行きたい」という感想が寄せられている。slow chicken は 2019 年 3 月にオープンしたばかりの比較的新しいお店であるが、かわいくておしゃれなものが好きな女子大学生にとっては、大変ウケがいいことが分かった。(写真 26)



写真 26 写真映えする slow chicken の飲み物

(野口撮影)

## ②オレンジジェラート (ジェラートショップ)

小浜ちゃんぽんマップのスイーツ店の紹介にも載っているオレンジジェラート。そこには「小浜産の朝取れ牛乳を使用した手作りジェラートショップ。」と説明がある。

「帰りに、近くにあるオレンジジェラートというお店に入った。みんなはジェラートを食べていたが、私は寒かったのでほうじ茶ラテを飲んだ。美味しかった。」(写真 27)



写真 27 オレンジジェラートのほうじ茶ラテ

(前山撮影)

この学生はジェラートショップでジェラートを頼んでいないが、小浜産の牛乳が使われた、小浜温泉らしいラテアートがされたほうじ茶ラテを注文し、しっかりと小浜温泉を満喫している。

ある学生が、「ほっとふっと 105 の近くには自然の湯気で蒸した温泉卵の露店や、ジェラート屋、セルフサービスで食材蒸し放題の場所など大人心くすぐるような場所もあり、子供からご年配の方まで年齢層幅広く楽しめる観光スポットだと感じた」と感想を述べている通り、slow chicken やオレンジジェラートのような女子大学生の心をしっかり掴めるようなお店が地域に存在していることも、観光地には必要なことなのかもしれないと考えさせられる。

### ③おゆっぴ〜（小浜温泉観光協会内）

小浜温泉観光協会は、とても趣のある洋館風の建物の中にあるが（写真 28）、学生たちは普段から東山手キャンパスやその周辺の歴史ある洋館を見ているせいか、だれも建物の見た目に驚いている様子はなかった（まだ歴史資料館の日本家屋の方が反応があった）。



写真 28 小浜観光協会

（小野澤撮影）

しかし、観光協会内にいたマスコットキャラクターのおゆっぴ〜には、一部の学生は反応し、一緒に写真を撮っていた。

「雲仙のマスコットキャラクターとして活躍しているおゆっぴ〜と写真を撮った。マスコットキャラクターは見たことはあっても、生で見る機会はありませんでしたのでこんなに大きかったんだと思った。」（写真 29, 30）

おゆっぴ〜は旅館組合サイト「小浜温泉」にもちょこちょこ現れたりするキャラクターであるが、長崎市の女子大学生の間にも浸透していて、見かけたら一緒に写真を撮りたいと思えるほどの存在だったとは、知らなかった。



写真 29, 30 おゆっぴ〜と写真を撮る学生たち

(小田撮影)

#### ④人や町の雰囲気について

これは旅行雑誌やどの観光情報でも見かけたことがない内容だと思うが、人の優しさや町の雰囲気を特徴として感じている学生もいた。

「小浜は街全体の雰囲気がとても明るくあたたかいように感じた。巡検中、私もいくつかのお店に入店したが、その度その度店員さんが明るく優しく話しかけてくださり、人のあたたかさにふれた。その様な点からも、観光客をまた訪れたいという気持ちにさせるのではないだろうかと感じた。」

#### 4.4 小浜温泉以外での行動・反応

この節では、小浜温泉以外での女子大学生たちがとった行動やその感想をまとめる。

##### ①千々石観光センター（通称じゃがちゃん）

###### ・じゃがちゃん

小浜巡検の最初の集合場所をここに設定したのは、「観光センター」という名称なので、ここで様々な観光情報が手に入ると思ったからであった。しかし学生たちはだれもここを千々石観光センターと呼んでおらず、「じゃがちゃん」と認識している。その理由は観光センターに到着した時によりよく理解した。千々石観光センターは、昔ながらの大きな土産物屋で、その入り口横に、揚げたてのジャガイモ2個を串に刺したご当地料理「じゃがちゃん」の店があるからである。(写真 31) 遠くから見ると一番目立つのはじゃがちゃんの赤い文字で、さらにじゃがちゃんのテーマソングが大音量でずっと流れており、そこにいると歌で洗脳されてしまいそうになるくらいインパクトが強い。ちなみに、じゃがちゃん自体はとてもおいしく、学生たちにとっても定番であるとともに大好評である。(写真 32, 33)

「集合場所で最初に食べたじゃがちゃんは、定期的に食べたくなる。小浜と言えはじゃがちゃんだと私は思う。」

「千々石でじゃがちゃんを食べた。普通のじゃがちゃんではなくじゃがバターのじゃがちゃんを食べた。おいしかった！」



写真 31 千々石観光センター入口横の「じゃがちゃん」の店

(小野澤撮影)



写真 32, 33 千々石名物じゃがちゃんとじゃがちゃん顔パネル

(小野澤撮影)

#### ・ムツゴロウ

千々石観光センターには、長崎らしいお土産がたくさん置いてあった。駐車場がそこそこ広いので、昔は観光バスが何台も止まって、たくさんの観光客が一斉に降りてきてこの土産物屋で買い物をしていたのだろうという想像がつく。

どういふわけか、店内にムツゴロウが飼われていて、ちょっとした看板魚になっていた。学生も「ムツゴロウがいた。少し気持ち悪かった。」と感想を残すくらいには、印象に残ったようだった。(写真 34, 35, 36)



写真 34, 35 ムツゴロウの水槽を覗きこむ学生たち  
 (左：小野澤撮影、右：小田撮影)



写真 36 看板魚のムツゴロウ  
 (小野澤撮影)

## ②雲仙地獄まで行く

小浜巡検では、小浜温泉で解散となった後、9 人もの学生が雲仙地獄まで観光に行っていたことを後日知った。

「時間があったので雲仙地獄にも寄った。車で通っただけだけど、煙が凄いのと独特の香りがした。」(写真 37)

「そのあとに雲仙に行った。雲仙に駄菓子屋があるので昔ながらのおもちゃや、シール、雑貨などがあり、見るだけで楽しかった。雲仙は温泉が有名。今回は入ることができなかったのですが、また行きたいなと思った。」

「もう1つの温泉スポットである雲仙にも車で20分ほどで移動することができ、雲仙にはロープウェイや昔ながらの駄菓子屋、雲仙地獄といった小浜以外にも楽しめる観光スポットが近くにあるのも魅力的だと思う。温泉も雲仙と小浜では大きく違い、雲仙温泉は硫黄を含んだ強い酸性の泉質で温泉らしい硫黄の匂いなどを楽しむことができ、一方、小浜温泉は匂いの少ない温泉で、リウマチ・神経痛に効果があると言われている。高温の源泉が湧き出るエリアで、湧出量×湯温で求められる熱量は、日本一と言われている。このようにいくつもの観光スポットが立ち並び、いくつもの宿があり幅広い年齢層で楽しむことができるのは小浜・雲仙の特徴だと考えた。」



写真 37 雲仙地獄の湯けむり

(前山撮影)

長崎市内から小浜温泉まで車で1時間もかかるので、運転する学生は帰りもさぞ大変だろうと考えていたが、女子大学生は、せっかくここまで来たらあと14km先にある雲仙地獄まで行ってしまおう、という心理が働くようである。

やはり、長崎市内の人にとって、小浜と雲仙はセットで観光したいスポットのようである。小浜温泉には何度も行ったことがあるという割にあまり知らないし詳しくないというのは、小浜温泉に行くときは雲仙温泉にも行くため、小浜温泉で滞在する時間が少ないからという可能性があるように思われる。

### ③後日、小浜温泉を再訪

小浜巡検の最中は、教員とゼミ生はラインで連絡を取り合っており、お互いの状況を把握できるようにしていた。また巡検で撮った写真はライン内のアルバムにまとめ、全員で共有できるようにしている。そのため、足湯に入らなかった学生も、蒸し料理を食べなかった学生も、足湯や蒸し料理を楽しんでいる学生たちの写真を見ることができ



る。これらの楽しそうな写真を共有した影響かは分からないが「小浜巡検では足湯に入ることができなかつたため、足湯が気になり、巡検の次の週の土曜日に友達と小浜を訪れ、足湯に入った。足湯の中の地面はすごくヌルヌルしていて、少し気持ち悪かったが、お湯自体はすごくあったかくてとても気持ちよかつた。あの足湯が無料は最強だなと思った。」という感想を述べている学生がいた。

実際は、なにがきっかけでまた小浜温泉に行こうと思ったかは分からないが、一回行った後に、今度は知り合いと一緒にまた行こうと思って実行していることは、とても理想的な観光行動であると思う。

小浜温泉の定番は、もう女子大学生には流行らないのだろうかと少し残念な気持ちでいたが、他にも「今度行くときは、雲仙の方にも行ったりして小浜の温泉街のホテルでゆっくりしたいなと思った。また、今回は蒸し料理を食べなかつたので、いつか色々な蒸し料理を食べてみたいと思った」「今回は食べなかつたが、(ほっとふっと105の)近くにある蒸し釜やに行ってみよう」という感想を持った学生もいるように、今回の小浜温泉での観光が、次回の観光にもつながるきっかけになったのはよかつたように思う。

## 5. 終わりに

最後に、3章の観光情報の内容と、4章の女子大学生の実際の観光行動とを比較しながら、女子大学生が小浜温泉という観光地に感じている魅力についての考察を述べる。

まず、小浜温泉の名物や定番とされているものは、長崎生まれ長崎育ちの県民女子大学生にとって、あまり魅力的に感じないのか、若干反応が鈍いように思われる。小浜温泉という観光地での観光行動においても、伝統的なものより、今の流行を取り入れたおしゃれでかわいい要素が多いものの方に惹かれる傾向が確認できた。一見どんな観光PRをしても女子大学生には響きにくいように感じるかもしれない。しかし女子大学生は行動が慎重なだけで、実際の現場に行ったり、人の話を聞いたり、友達の写真を見たりしてみることによって、徐々に「自分もやってみようかな」と行動に変化が起きるものであるということも明らかになった。小浜温泉の強みは、温泉に由来する観光の軸となる名物がしっかりとある一方で、さまざまな要素を持つ新しいタイプのお店の出店にも寛容なことで、幅広い年齢層の観光客を惹きつけているのだと思われる。女子大学生は、きっかけさえあれば、小浜温泉を何回もじっくり観光してくれる可能性がある。

また、長崎市民から見て小浜温泉は、雲仙方面の観光ルートの一部として捉えられている節があり、それにより、意外と魅力を増しているらしいことも分かってきた。小浜温泉には、小浜歴史資料館といった、まだ県民には広く知られていない素敵な観光スポットがある。定番や流行だけでなく、このように良質な観光資源をどのようにPRしていくかも、今度の小浜温泉の課題であるように思われる。

なお、この度の女子大学生の県内観光行動についての分析は、日帰りの巡検参加者だけを対象にしたものであるため、十分な考察に至れていない。今後、県内観光について研究をする際は、今回の様々な反省を踏まえてより有意義な結論が出せるように努力したい。

## 参考文献

- ・安達可菜・宗邦彦・高村文人・永山一樹・渡邊貴史（2009）：温泉地域らしさからみた街路景観の評価：長崎県小浜温泉地域を事例として，地域環境研究：環境教育研究マネジメントセンター年報，1，25-35.
- ・江村有香・禅院昭・秋山克史・渡邊貴史（2009）：長崎県小浜温泉地域における地域資源の活用に関わる取り組みの現状，地域環境研究：環境教育研究マネジメントセンター年報，1，37-45.
- ・後藤恵之輔（2013）：『シリーズ：長崎文献ライブラリー006 新長崎ことはじめ』長崎文献社.
- ・白木信彦編(2018)：『まっふるマガジン まっふる長崎 ハウステンボス 佐世保・五島列島 '19』昭文社.
- ・寺井邦久編(2011)：『長崎遊学マップ7 島原半島ジオパークをひと筆書きで1周する』長崎文献社.
- ・長崎新聞（2021年3月8日付記事）：「ふさとで“心呼吸”の旅」県民県内割引スタート 宿泊申し込み殺到.
- ・長崎新聞（2021年4月20日付記事）：「ショック」「仕方ない」長崎県民宿泊割一時停止 GW 控え 観光関係者ら落胆.
- ・長崎新聞（2021年6月23日付記事）：長崎県 宿泊キャンペーン再開7月1日から 中村知事「安心して利用を」.
- ・長崎新聞（2021年7月2日付記事）：「ふさとで“心呼吸”の旅」再開 施設や客ら歓迎.
- ・長崎新聞（2021年12月11日付記事）：県内宿泊割「ふさとで“心呼吸”の旅」2月末まで延長 近隣3県在住者も対象に.
- ・半島地域魅力発見委員会編(2009)『半島へ出かけよう！～ながさきの半島魅力発見ガイドブック～』半島地域魅力発見委員会事務局.
- ・古川美晴編(2021)：『るるぶ情報版 九州 26 通巻 5877 号 るるぶ温泉&宿 九州』JTB パブリッシング.

## 〈ウェブサイト〉

- ・雲仙市観光ナビ：<https://www.city.unzen.nagasaki.jp/kankou/>（最終閲覧日：2022年2月28日）
- ・NHK 特設サイト新型コロナウイルス，日本国内のワクチン接種状況：  
<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/vaccine/progress/>（最終閲覧日：2022年2月28日）
- ・NHK NEWS WEB（2020年9月1日付オンライン記事）：“Go To トラベル”延べ556万人利用 コロナ感染は6人 官房長官：  
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200901/k10012595081000.html>（最終閲覧日：2022年2月28日）
- ・NHK NEWS WEB（2021年11月13日付オンライン記事）：Go To トラベル 来年2月ごろ再開すべきとの意見 政府内で強まる：

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20211113/k10013346181000.html>（最終閲覧日：2022年2月28日）

・NHK NEWS WEB（2022年1月7日付オンライン記事）：Go To トラベル “再開判断する時期ではない” 斉藤国土交通省：

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220107/k10013419081000.html>（最終閲覧日：2022年2月28日）

・小浜温泉旅館組合公式サイト：<https://obama.or.jp/>（最終閲覧日：2022年2月28日）

・国土交通省観光庁ホームページ（2021年3月23日付）：Go To トラベル事業関連情報：[https://www.mlit.go.jp/kankocho/page01\\_000637.html](https://www.mlit.go.jp/kankocho/page01_000637.html)（最終閲覧日：2022年2月28日）

・国土交通省観光庁ホームページ（2021年11月19日付）：今後の観光需要喚起策について：[https://www.mlit.go.jp/kankocho/news06\\_000537.html](https://www.mlit.go.jp/kankocho/news06_000537.html)（最終閲覧日：2022年2月28日）

・Go To トラベルホームページ：<https://goto.jata-net.or.jp/>（最終閲覧日：2022年2月28日）

・slow chicken についてのウェブサイト：

<http://shimashima.adthink.net/feature/newopen/20190516slowchicken/Posts.html>  
（最終閲覧日：2022年2月28日）

・島原半島世界ジオパークホームページ：<http://www.unzen-geopark.jp/>（最終閲覧日：2022年2月28日）

・第2弾「ふるさとで“心呼吸”の旅」地域限定クーポンホームページ：<https://shinkokyu-coupon.com/news/>（最終閲覧日：2022年2月28日）

・長崎県ホームページ（2022年2月2日付知事記者会見）：新型コロナウイルス感染症に関する記者会見：[https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/hukushi-hoken/kansensho/corona\\_kaiken/corona\\_onegai44-corona\\_kaiken/](https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/hukushi-hoken/kansensho/corona_kaiken/corona_onegai44-corona_kaiken/)（最終閲覧日：2022年2月28日）

・長崎県観光連盟・長崎県文化観光国際部観光振興課，長崎県ながさき旅ネット，小浜温泉ぶらぶら歩き：<https://www.nagasaki-tabinet.com/course/60262>（最終閲覧日：2022年2月28日）

・ながさき旅ネット，第2弾 ふるさとで“心呼吸”の旅キャンペーン＜長崎県民限定＞：<https://www.nagasaki-tabinet.com/feature/furusato-sinkokyu>（最終閲覧日：2022年2月28日）

・日本経済新聞（2020年12月14日付オンライン記事）：GoTo トラベル全国で一時停止 12月28日～1月11日：

<https://www.nikkei.com/article/DGXZQ0FS147PS0U0A211C2000000/>（最終閲覧日：2022年2月28日）

・日本経済新聞（2021年11月27日付オンライン記事）：「県民割」で観光支援 利用好調、需要回復には限界も：

<https://www.nikkei.com/article/DGXZQ0CC197NV0Z11C21A0000000/>（最終閲覧日：2022年2月28日）

・毎日新聞（2020年12月17日付オンライン記事）：GoTo 全国停止は「予防」？ 「エビ

デンスない」強調で、政府説明は苦しい「後付け」:

<https://mainichi.jp/articles/20201217/k00/00m/010/359000c>